

10. 島 善高氏

しま・よしたか 早稲田大学社会科学部教授

日時 : 2001年12月17日

出席者 : 伊藤隆 梶田明宏 小池聖一 西川誠 伊藤光一 赤川博昭 千葉功
黒澤良 大久保文彦 清水唯一郎 富坂賢 東中野多聞 鹿島晶子
西藤要子 高橋初恵

伊藤 そろそろ時間ですので、始めさせていただきます。きょうは、梶田君が講師の紹介をさせていただきます。

梶田 本日は、早稲田大学社会科学部の島善高先生にお願いいたしました。島先生は法制史のご専門でいらっしゃる、私が知っている範囲では、皇室制度関係のことと、それから、井上毅のことを中心にやられているというふうに理解しておりますが、法制史ということで、ちょっとわれわれの知らない、中国まで含めた、日本の古代から近代までカバーされておられるようなので、きょうはお話ししていただければと思います。

島 ただいまご紹介いただきました島と申します。よろしく願いいたします。こういう場に、お招きいただいて、非常に緊張いたしております、なぜ私のようなものに声がかかったんだろうと思っております。だいたい一流の人が一渡り終わったということで、声がかかったんじゃないかと思っておりますのであります。

伊藤 いえいえ、そんなことはない。そんなことを言われたら、これからやっていただく方はなんとも言いようがないじゃないですか(笑)。

島 いまご紹介がありましたように、私は法制史が専門でありまして、早稲田大学の法学部を卒業いたしました、そのあと國學院大学の大学院法学研究科にまいりました。当時、退職なさってましたけども、瀧川政次郎という先生がいらっしゃる、その先生のすぐそばに下宿いたしました、ちょうど10年間、律令の勉強をいたしました。律令と申しますと、奈良平安時代のものでありまして、律令格式、六国史、中国の二十二史、四書五経、だいたい史料というのはそういうものでありまして、新史料が出てくるなんていうことはほとんどないわけでありまして、6畳一間の下宿に、殆んど史料は揃う。そして、朝から晩までその文字を眺めて、その文字がどういう意味であるのかをじっと考えるという勉強、研究方法であります。そういうことをやっていて、だから、論文もそんなにたくさん書けません。10年間で、律令については4本か5本しか書いておりません。

ところで、私が博士課程におりました昭和55年に、國學院大学が創立百周年を迎えるということで、法学部の先生達が國學院に寄贈されております井上毅の文書を研究しようということになって、梧陰文庫研究会というのがつくられました。レジュメにもあります

ように、すでに稲田先生とか、海後先生とかが井上の文書を使って立派な業績をあげておられました。主要な史料はそこで紹介されておりました。ただ、手付かずと言いましょか、あまり研究されていなかったのが皇室典範に関する史料であったわけです。法学部の先生達がよってたかってご覧になったんですが、やはり皇室制度というのは律令制度がわかかってないと基本的なことはわからないというので、大学院の博士課程におりました私にも声がかかったわけでありまして。大学の先生方はみな忙しい。私はドクターで職もないということで、お前はいちばん暇だからというので、基本的な史料を整理しろということになりまして、近代史に足を踏み込むことになりました。

いままでのように、6畳一間に籠っているのではなくて、憲政資料室へ行ったり、あるいは、梶田さんのいらっしゃる書陵部に日参をしたりしまして、そして、皇室関係の史料を漁りまくるといふ勉強を始めました。そういうことで、私はもともとは古代律令法が専門で、何か目的があって近代史をやったというわけではございませんので、いわば近代史は副業なわけでありまして。その後、皇室制度関係では、「はじめに」というところに書いておりますような書物をいろいろ出しまして、一通り皇室典範ができる過程は究明できたのかなと思っております。

ところで、梧陰文庫の史料というのはマイクロフィルムにもなっておりますし、また、『井上毅伝 史料篇』とか、『井上毅伝外篇 近代日本法制史料集』（全二十巻）が出ておりますけども、まだ紹介されていない史料、手紙がいろいろと発見されたり、國學院が買ったりしたものがございまして。したがって、いまはそういう史料、書簡類を全部ひっくるめて新しく目録をつくり直そうという作業が進めてられております。國學院大学に日本文化研究所というのがありますし、そこに高塩博という人がいますが、その人が中心になって、柴田伸一氏や、原田一明氏（法学部助教授）、あと若い人が3人で、6人でやっておられます。私は客員で名前を連ねておりまして、実労働はいたしておりません。いずれその『梧陰文庫総合目録』というのが出る予定でございまして。

そういうことで、私はずっと近代史を勉強するということになりました。さて、本日は、「私が出会った近代史史料」と題しましたけれども、いま、申しましたように、私は本来律令が専門でございまして、いまなお、律令の研究を細々とやっております。そういうことで、本日は、皆さま方からすれば、陳腐な、そんなことは知ってるよと思われる史料ばかりかもしれませんが、せつかく梶田さんから何か報告しろと言われたものですから、これまでに会った史料を御紹介して、その責めを塞がせていただきたいと思います。

ということで、レジュメの「二. 渡辺廉吉文書のこと」というところに入りますけれども、私が梧陰文庫を利用して皇室典範のことを研究しております時に、絶えず念頭にあったのが渡辺廉吉という人でございまして。渡辺廉吉は長岡出身で、外務省にいたり、太政官にいたりしているんですが、伊藤博文がドイツへ憲法調査に行った時には外務省の書記生でドイツにおりました。帰ってきますと、制度取調局に入りまして、それから、憲法調査の仕事を行います。それから、憲法ができたあとには、帝室制度取調掛を命じられております。レジュメにも書いておりますように、渡辺廉吉伝記刊行会というところから、昭和9年に『渡辺廉吉伝』というのが出ております。その後ろにどういう仕事をしたのか、

どういう書物を持っているのか、どういう草案があるのかという目録があるんですね。それは日本のものも、洋書も問わずございました。その伝記によりますと、渡辺の史料は東京大学図書館に寄贈するということが書いてあるものですから、私も方々手を尽くして探しまして、史料編纂所の人達にも探してもらったんですが、杳として行方がつかめません。あれが出てくれば、もう少し闇の部分が明らかになるのではないかと考えておりますけれども、本日いらっしゃる先生方で何かご承知のこととおありでしたら、是非お教えいただきたいと思います。

そういうことで、渡辺廉吉、渡辺廉吉とお題目のように唱えながらあっちこっち歩いて回っておりましたところ、お孫さんになる方、渡辺廉太郎という方に遭遇いたしました。もう定年退職をなさっていらっしゃって、70近い方ではありますが、その方が平塚にお住まいでありまして、平塚の博物館に史料を寄贈されたということがわかりました。渡辺廉吉の日記、私信、廉吉宛の書簡、著述、当時の写真集が博物館に寄贈されました。これらのうち、現在、平塚の博物館にありますのは、巻物になった来翰、それから、ドイツから来た葉書だけでありまして、その他の日記、私信、著述、礼服、写真集は渡辺廉吉の出身地であります長岡の郷土資料館に展示されております。有名な悠久山にございます。國學院大学の小林宏先生は長岡出身でありまして、私は先生と一緒に長岡へ参りまして、そこにある日記を全部コピーしてまいりました。但し、日記は原本ではございません。恐らく、さきほど言いました昭和9年に『渡辺廉吉伝』をつくる時に、原本の日記から筆写したものだろーうと思います。原本はどこに行ったのかはわかりません。それから、さきほど言いました廉吉伝の後ろに載せてあるいろんな貴重な書類も、残念ながらございませんでした。

伊藤 私信は？

島 私信は長岡にございます。これも読み下してあります。来翰だけは現物です。写真集もなかなか貴重で、柳原前光の若い時の写真もあります。当時、写真を名刺代わりに交換しているんです。いろんな人が載っていて、貴重でございます。そこで、國學院大学の小林先生と、それから、原田一明という法学部の助教授と3人で、これを出版することにしました。渡辺は最終的には貴族院議員になるんですが、明治から大正にかけて役人の一生をだいたいフォローできるので、これは活字にしてもよかろうということで、すでに校正も終わっております。私信も活字にすることにしました。来翰も出版する予定です。憲政資料室ですでに写真を撮られたようですが、憲政資料室ではお出しにはならないでしょうから、我々が出すということにして、出版社もすでに決まっております。まだ、関連資料があるでしょうが、渡辺廉吉伝をとりあえず出しておけば、新しい情報も入るだろうと考えております。

ただ、ドイツ人から渡辺廉吉に来た手紙や葉書がたくさんあるんですが、これはどう頭を抱えても解読がなかなか困難で、少々ドイツ語ができるぐらいではちょっと読みこなせないもので、まだ宿題として残っております。ということで、渡辺廉吉の東大図書館に寄贈されたと言われる資料がどこに行ったかご存じの方がいらっしゃれば、是非お願いしたいと思います。

伊藤 それはこれとは別なんですか。

島 ここにあるのとは別です。

伊藤 東大図書館に寄付したというのは。

島 ええ。たとえば皇族令の草案とか。

伊藤 そういう書類ですか。

島 名前は『渡辺廉吉伝』に載っております。八方、手を尽くしました。社研も行きました。法学部にも行きました。明治新聞雑誌文庫も行きましたが、所在不明です。

伊藤 いつ頃、寄付したんでしょうね。

島 わかりません。

伊藤 恐らくこの伝記ができてから。

島 昭和9年に寄贈する運びになっているという表現だったかなと思います。どこか図書館の隅っこに、ダンボールに入れて置いてきぼりになっているかもしれないです。ちょうど私の知り合いがいま史料編纂所におりまして、彼に頼んでいるんですけども、まだ何の返事也没有せん。

それでは、次にいかせていただきます。3番目が「奥宮文庫」ということですが、これも井上毅に関連して遭遇した史料でございます。井上については、いままでいろんな研究があるんですが、井上毅が意外と中江兆民や植木枝盛と親しい、自由民権家と親しいわけなんです、なぜ親しいのか謎でした。親しいという証拠は、木野主計先生などが明らかにしておりますが、一体どういう理由で親しいのかがなかなかわからなかったわけでありまして、いろいろ調べておりますうちに、中江兆民や植木枝盛の先生である奥宮慥齋という人物がおりまして、その人物が土佐から出て教部省の役人をしておりました。明治10年に亡くなる人でありまして、奥宮慥齋の自宅では、万国公法を読む勉強会とか、中国の古典の荘子を読む勉強会を開いているんです。そこに兆民も間違いなく出席していましたし、植木枝盛も出席しておりました。日記に書いております。その日記を読んでいたところ、井上毅が奥宮慥齋の官舎の隣にいたことが明らかになりました。これはということで、奥宮慥齋を調べようということにいたしました。奥宮慥齋というのは官吏の傍ら、円覚寺のお坊さん、今北洪川という人について坐禅の会を開催しておりました。これは陸奥宗光のお父さんの伊達千広と一緒に結成したものです。そこには山岡鉄舟も加わっておりまして、兆民もおりました。植木枝盛が果たしてそこで参禅したかどうかはわかりませんが、植木枝盛の日記を読めば、これは禅の知識なくしては絶対にこういう文章を書き得ないというのがありますので、恐らく慥齋を中心にして、いま言いました人達、あるいは土佐の若い人達にそういう禅的な考えが広まっていったんだろうと思っております。私は、「鉄舟と兆民と悟陰と」という論文を『井上毅とその周辺』（木鐸社、2000年3月）という書物に書きました。また、今年の6月の『日本歴史』にもコラムで、「自由民権と禅」ということで書かせていただいておりますから、詳しくはそれをご覧いただきたいと思えます。

そういたしますと、自由民権の「自由」というのは、禅宗では中世以来しょっちゅう使っている言葉なんですね。仏道の修行の究極目的は何かということ、全てから自由になることだと。自分の固定観念からも自由になることだといつも使っております。そういう目で、

兆民の文章、枝盛の文章を読みますと、これはなるほど禅的な「自由」を念頭においている。私は袋叩きにあうことを覚悟して、論文を書いたんです。その時に、「民権」に近い考え方も禅の思想のなかにあることを知りました。そういうところから、是非これは調べてみる必要がある。そのためには、奥宮慥斎という人物をもっとやってみる必要があるということで、調査し始めました。

また、中江兆民の伝記を読みますと、中江兆民がフランスへ行くわけですが、その時に、中江兆民は大久保利通に直談判をして行かせてもらったということを書かれているんですけど、よく調べてみると、奥宮慥斎はすでに大久保利通と知り合いでありまして、私は恐らく奥宮慥斎が兆民のことを大久保に頼んだと考えています。あるいは兆民は元老院の議員であった勝海舟に初めて会って借金をするんです。快く貸してくれたというのが伝記に書いてあるわけですが、実は、勝海舟と慥斎は知り合いであって、日記によれば、中江兆民が借金をする前日に慥斎と勝海舟は会っているんです。私は、これは慥斎が勝海舟に兆民のことをよろしく頼んだに違いないと思っております。それから、兆民がフランスにいと、帰国命令が下る。それに対して井上毅は帰国延期を画策するんです。それはなぜかということもこれまでは充分解明されてなかったわけです。さきほど言いましたように、井上毅は奥宮慥斎の隣に住んでいたわけで、その時には一歩早く中江兆民はフランスへ行っているんです。そのあと、しばらく遅れて、井上毅はフランスへ行くわけですが、その時に慥斎は門下生の兆民がパリへ行っているから、よろしく頼むと井上に頼んだに違いないと思っております。そういうことになりますと、中江兆民の伝記を調べる上にも、必ずや慥斎のことを調べないといけないということになります。吉川弘文館から兆民の伝記をお書きになった京都の飛鳥井雅道先生に、この抜刷を送ったんですが、なんの返事も来ないんです（笑）。

ところで、奥宮慥斎は明治10年に亡くなりますけども、亡くなる直前まで丹念に日記をつけておりました。それが『慥斎先生日記』というものでございまして、文政13年から明治9年までの自筆日記です。そのあと、没するまでの病床日記を子どもの正治という人が書きました。慥斎自身が書いた日記を、大正時代になって検事をしていた正治が一応ちゃんと読めるように解説をしております。東大の史料編纂所でもすでにマイクロフィルムを撮ってありますから、わざわざ高知まで行く必要はございません。ただ、その息子の読み方に少々間違いがあります。1枚めくっていただきますと、墨で書いたのがありますが、これがその日記です。これは天保6年であります。これは27歳ぐらいなんですね。字も判読するのにしばらく時間がかかりますけども、私の研究室で院生達とこれを読んでいます。仏教、儒教、陽明学、それから、日本の古事記とかに恐ろしく詳しい。それに、和歌が堪能である。漢文もうまい。これはあとでご覧になっていただきますと、和歌なんか出てきますけど、27歳の日記とはとても思えないぐらいに若い時から成熟していた。お父さんも土佐の先生なんです。漢文が出てくると、どこで返り点を打ったらいいのかとか、韻を踏んでいるのかどうかとか、目下いちいち院生達と取り組んでいる最中でありまして、これを全部解読するまであと数年はかかりそうですが、楽しみながらこれを行っているところであります。

実は、この奥宮慥齋の3番目の子どもが奥宮健之と言いまして、大逆事件で幸徳秋水と一緒に処刑になった人です。高知県の市民図書館にある奥宮文庫の目録があります。これはいまお返ししますけど、この後半部分は3番目の子どもの健之についてのものですが、すでに阿部恒久という人が『奥宮慥齋全集』というのを1988年に出しております、そのなかに健之の分はすでに入っております。

伊藤 原本がその市民図書館に。

島 ございます。いま、この目録をお渡しします。日記と主要な著作だけはマイクロフィルムを撮ってきております。もし必要な人があれば、図書館にございますので、いつでも東京にいながらみることが可能であります。

伊藤 その目録はコピーさせていただいていいですか。

島 していただいて結構です。この日記はなかなか質が高い。たとえば普通の歴史家だけとか、仏教学者だけ、陽明学者だけがみたら、とても太刀打ちできない、そういう質の高い日記であります。

伊藤 慥齋先生は高知にいらっしゃったわけですか。

島 高知にいて、明治初年に最初、神祇官の役人になっていました。

伊藤 それで、東京に出てくるわけですか。

島 教部省の役人になって、亡くなりますけど。

伊藤 教部省の何を。

島 そこまでちょっとまだ確認しておりません。失礼、確認はしてあります。記憶にないだけです。教部省八等出仕大録、それから、大教院大講義などを歴任し、そして67歳で没しております。

伊藤 この時、もう相当なお歳なんですね。

島 そうですね。明治10年に67歳。

伊藤 その当時で言えば、非常な高齢ですね。

島 そうですね。

伊藤 教部省の研究というのもあまりないですからね。非常に貴重なものだと思います。

島 皇學館にいる新田君もやってますけど、まだまだやれますね。あるいは國學院の阪本是丸さんとか、もうちょっとやってもいいかなと。これをあとでご覧になると、教部省関係の史料がいくつかございますので、それも使えると思います。

それから、奥宮慥齋がそれほど優れた人間であるのにあまり評価されなかったもう一つの原因は、さきほど言いました健之が大逆事件で死刑になったからだと思います。日記も、あとで息子が清書した分には健之の名前はほとんど消しているんです。だから、健之の名前が一门に及ばないようにという配慮からなんでしょうか。そういうことがあったので、出版もされなかったのではないかなと思っております。それから、もう一つ、功罪の罪になるのは、大久保利謙先生がかつて『日本歴史』のなかでこの日記を紹介され、愛国社結党のこともちょっと書かれているんです。ただ、あまり重要な史料であるという書き方はされていないんです。だから、それ以後、調べる人も少なかったんじゃないかと思います。最近では、私のこの論文をお読みになったからかどうか、いろんな兆民の研究者が土佐まで

出かけて、これを調べているということです。有名な研究者、皆さんもご承知の人ですが、名前は出さないでおきましょう。ということで、奥宮文庫は、いつ活字になるかはちょっと見当もつきません。

伊藤 これは健之と両方入っている文書ですね。

島 入っております。後半部分が健之です。

伊藤 幸徳秋水の手紙などもあるんですね。

島 あります。それから、私は3回ほど土佐に行って、幸徳秋水のお墓なんかを回ってきたんですが、幸徳秋水の書が土佐には残っているんです。あれもレベルが高いですね。禅をやっているのは間違いない。兆民のところの下宿しながら、恐らく禅をやったんじゃないかと思っています。そういう禅的な素養がないと、書き得ない文章を残しています。これをもう一遍やり直す必要があるだろうと思います。

それから、次、4番目にまいります。私は昨年10月16日から今年の9月16日まで1年間、大学の特別研究期間制度の適用を受けて、普通は海外へ留学されるわけですが、私は田舎が佐賀県なもんですから、郷里の佐賀に戻りました。そして、何をしていたのかというと、毎日、佐賀県立図書館郷土資料室というところに通って、佐賀県の郷土史を勉強したんです。というのは、いままでは、田舎は嫌だと思っていたんですけど、ちょうど50歳になるものですから、郷土愛が少しずつ出てまいりまして、俺のルーツはどうだろうとか、親戚の人達はどのようにしているだろうとか、親孝行もしたいというのがあって、30年振りに里帰りをしたんです。それともう一つの目的は、佐賀からは明治維新の時に、副島種臣、江藤新平、大木喬任、大隈重信という皆さんがよくご承知の4人が出て活躍するわけですが、なぜ佐賀の人間が活躍できたのか。薩摩、長州はだいたい武力を使って幕府を倒したからとわかりますが、佐賀の連中がなぜ活躍して、その後も明治政府で活躍したかを解明したかったからであります。

そして、いろいろ勉強しているうちに、佐賀は人口も少ないところですから、いろんな情報が入ってまいりまして、佐賀県の伊万里市がちょうど市史をつくっている。伊万里のいろんな人から持っている書類を出させたところ、峰家というのがありまして、このレジュメの4番目ですね。代々、町医者をしている家柄でございます。そこの峰家からいろいろ資料が出たということで、そのなかに大隈重信宛の書簡がたくさんあるという情報を受けまして、早速見に行きました。

伊藤 重信宛ですか。

島 そうです。レジュメの5以下の「二里町峰家文書資料目録」の大隈重信の箇所だけをコピーしてまいりました。自腹ではちょっと大変だったので、大学と掛け合いまして、大隈さん宛だからということで、図書館で金を出してくれたので、マイクロフィルムに撮りました。最近、マイクロフィルムというのは時代遅れだそうですね。CD-ROM化したほうが良いと言われております。ただ欠点は、CD-ROMにすると、すぐ瞬間的にコピーされてしまうので、管理が難しいと言われてますが、私はこっそりとCD-ROMのほうもつくってもらいまして、それは研究室にあります。だから、いちいちマイクロをみる必要はございません。いま、早稲田大学図書館では公開はしばらくしない、私のところで一

応整理をしてから公開をするということになっております。

さて、その峰家というところになぜそういう資料が残っているのかということですが、レジュメの2ページをご覧になっていただきますと、そこに峰源次郎という人の経歴を書いております。読ませていただきますと、

弘化元年8月15日、伊万里の医者峰静軒の第二子として誕生。号は渭陽。安政6年 谷口藍田（佐賀の有名な学者）の門に入り漢籍を修め、万延元年17歳の時に佐賀の大庭雪斎（これは蘭学者で、大隈重信も学んだ人です）の塾に入り、好生館（医学校、いまの佐賀県立病院の前身です）で医学を学ぶ。後、蘭学研究のために長崎で蘭学者三方季三郎（みかたすえさぶろうと読むんでしょうか）について、その傍ら中島広行に和歌を習った。文久3年、20歳の時、再度大庭雪斎の門に入り、好生館に復学した。また古川松根（お殿様の傍にいた人で、最期はお殿様に殉死した人）に和歌を学んだ。その後、また長崎へ行き、蘭学を講じながら英書に学んだ（英語が得意だったのは、恐らくこの時に勉強したからでしょう）。慶応元年江戸に留学。明治3年、27歳で大学東校に入校。同4年、ドイツへ留学の途次、米国で奇禍に遭い（ドイツに行かずに）帰朝した。明治5年7月、北海道開拓使に招かれ、医学校教授兼病院勤務のため札幌に赴任。後、大蔵省翻訳局に迎えられた。大隈重信が峰源次郎の高名の知り、引き立てたと（伊万里の人は）いう。峰は大隈邸宅の一角に住み込んで（そこから大蔵省に勤めていたわけです）、（大隈宛の）外国人からの手紙の翻訳に当たったほか、大隈の旅行にも随行し、秘書的役割を果たしていたと思われる。

実は、大隈重信が明治14年政変の時に、明治天皇についてずっと東北巡行をするんですが、峰源次郎も全部ついて回っている。その時の詳細な日記があるんです。これはすごいと思って見たんですが、残念ながら、政変に関することは一つもないんですね。どこを見物に行った、風景はどうだった、そういう記事ばかりです。ただ、最後の文末に、関東へ戻ってきたら、ほかの人達にはいろいろ迎えがたくさんいたのに、大隈重信を迎える人はほとんどいなかったと書いてあります。その一行が非常に印象的なんですが、そういう資料などもございます。そのほかにも、大隈がどこか旅行する時にはついていっておりますから、秘書的に使っていたんでしょう。明治14年に大隈は官界を去るわけですが、この人はもうしばらく大蔵省勤めをして、明治24年、48歳の時に職を辞し、郷里に帰って医業に専念しました。いろいろ功績があって、日本医師会長から、大正13年に表彰されて、昭和6年に亡くなりました。いろいろな書物もたくさん書いてます。いまお返ししている目録をご覧になれば、おわかりかと思えます。

梶田さんが是非紹介してくれというものですから、大隈宛の英文書簡の箇所だけは全部ここにコピーしておきました。私もまだ全部みておりません。実は、私の研究室にエール大学出身の英語のできる人が入ってまいりまして、彼にいま調べさせているところです。この文書の中には、アーネスト・サトウの手紙もありまして、そこだけちょっとコピーを取ってまいりました。11と書いているところです。これが多分アーネスト・サトウの直

筆だろうと思います。この英文の手紙には、峰源次郎が訳したであろうと思われる翻訳（下の段にコピーしてあります）が付いております。これは本当は峰源次郎は大隈さんにやらないやいけなかったんでしょうけど、そのまま自分で持っていたんですね。それで、佐賀まで持って帰ったと。

伊藤 大隈文書のなかにも、外人からの手紙は少し入ってますよね。

島 あります。峰源次郎訳のがいっぱいまだあります。

伊藤 どう分かれたのかが不思議ですね。

島 そうですね。峰家の文書はまだ伊万里市の市史編纂室に寄託されているだけで、ご子孫の方に私が直接電話をしましたところ、「それなら早稲田に寄贈しましょうか」とおっしゃいましたが、そのあとすぐ、伊万里市史編纂室の方では、「これは郷土の史料として残したい」と言われ、いままだ駆け引きの最中でありまして、寄贈先はまだ決まっておられません。

アーネスト・サトウの手紙でありますけども、小野義種という名前が登場いたします。この小野義種というのは恐らく小野梓の親戚の人じゃないか。その人の就職をアーネスト・サトウが大隈重信に依頼したものだだろうと思います。大隈文書のなかにも、これと関連して、小野義種の手紙がありまして、アーネスト・サトウから取りなしを聞いたという旨の手紙があります。それから、『一外交官の見た明治維新』の下巻のなかに、アーネスト・サトウは「私の書記の小野」とか、「公使館の書記小野清五郎」と書いているんですが、恐らくそれとこの小野義種は同一人物じゃないかなと思っております。いろいろ調べてみると、おもしろいかもしれません。ということで、これもよろしいでしょうか。1時間ちょっとぐらいで、終わりそうです。もう少しゆっくり喋ったほうがよかったですね。

伊藤 ご自分のいちばんよろしいスピードでお話してくださいませ。

島 次にレジユメの「五」をご覧いただきたいと思います。「中国社会科学院近代史研究所」と書きましたけれども、私は最初申しましたように、瀧川政次郎先生について律令の勉強をしました。その瀧川政次郎先生というのは、昭和8年から終戦まで建国大学の教授をしたり、司法省へ勤めたり、満州に生活しておられました。その途中、昭和12年から14年まで北京に住んでおられました。中江丑吉という人も近くにおりまして、中江丑吉の日記がいま京都大学にあるんですが、山室信一さんが教えてくれましたけど、そこには瀧川先生の悪口が書いてあるそうです。

それはそれとして、その先生が亡くなられたので、私は非常にお世話になったので、供養にもなるだろうということで、瀧川政次郎伝みたいなものをいずれ書きたいと思って、ここ4、5年は毎年中国へ出かけております。さきほど言いましたように、昭和12年から14年までの2年間、瀧川先生は北京に滞在されて、外務省の囑託、司法省の囑託、関東軍の囑託をしておられました。瀧川先生の奥様という人は、石本新六の娘です。そういうことで、その石本新六の子どもも陸軍に何人かおりまして、義兄弟になるんですが、そういうツテもあって、関東軍などとコネクションがあった。ふんだんに研究費をいただいたそうであります。それから、司法省、いまの法務省の図書館に、この時代の中国の法律の本がたくさんあるんですが、それは殆ど全て瀧川先生が買っておかれたものだそうであ

ります。そういうことで、そういう時代のことをもう少し明らかにしようと思っているわけですが、その僅か2年の間に、瀧川先生は、これも興亜院か関東軍かどちらか知りませんが、肝いりで、国立新民学院という学校を北京につくるんです。これは官吏養成のための学校であります。そのことを僕は調べてみようと思って、レジュメの「五」のところに書いてありますけども、「国立新民学院初探」（『早稲田人文自然科学研究』、第52号、平成9年10月）という論文を書きました。新民学院がどういう経緯でできて、どういう人達がいる、どんなことを教えたかということ調べてみました。結構、日本からもたくさん教員が行っております。その名前もだいたい明らかになりました。その後、もう一つ、「中国における瀧川政次郎博士」という文章も、これはほとんど誰も読んでくれない、近代史の人は読まない雑誌でありますけども、「古代文化」（第51巻第2号、平成11年2月）に書きました。お返しします。

伊藤 角田さんが……………。

島 そうです。その後、いろいろ調べておられますと、瀧川先生が北京滞在中に、昭和13年でしたか、北京には中華民国臨時政府という傀儡政権が樹立されるわけです。その政権の司法院長に董康さんという人がおられました。この人は司法畑の人なんですが、書誌学にも詳しい人で、日本に度々やって来ては、中国で滅んで、日本にだけ伝わっている中国の古書を集めて、それを中国へ持って帰って出版するというのをやっておられました。瀧川先生は、その人のことを是非調べてくれと遺言のように私に言われましたので、私はその人のことを調べておられます。ところで中国社会科学院近代史研究所の図書室には、結構書物がございます、そこに挙げておられます董康さんの「秘書志」は自筆のものであります。「董康残稿」も自筆です。「董綬金・劉翰怡手札」も自筆のものであります。こういったものが残っております。董康自筆本の存在はほとんど知られてない。有名な『書舶庸譚』という書物がありまして、董康さんが日本に来た時の日記ですけど、恐らくその原本とも思えるようなものが「董康残稿」なんじゃないかなと思っているんですけども、これはもう少し調べてみないといけません。なにしろ中国の文語文でありまして、しかも崩して書いてありますから、歯が立ちません。近代史研究所の人に是非やってくださいと頼んでおられますが、まだ、なんの返事もまいりません。

そういうことで新民学院のことがずいぶんわかってまいりますと、興亜院とか関東軍とかとの関係を知りたい。そうすると、当時中国ではつくられました新民会のことをもうちょっと調べてみようということで、調べましたところ、レジュメに書いてありますような新民会の史料がございました。このうち一部は国会図書館にもありますけども、日本にないものもありますので、コピーをとろうとしたところ、ないんです。誰かが借り出している。名前が房建昌という40前後の男性の研究員が、「私がいま新民会について調べている。いま、あなたが請求した史料は私が借り出している。あなたに見せたいが、今その史料はどこにあるかはわからない」ということで、とうとう見せてもらえませんでした。この人は日本に何度か来て、東洋文庫の方々とコンタクトをとっているそうです。そういうわけで、残念ながら、史料をコピーすることはできませんでした。新民会関係の史料がこういうところにあるということだけお知らせしておきましょう。

ところで、社会科学院近代史研究所の2階には一般の図書室があるわけですが、5階に行きますと、特蔵室（特別資料室）がございまして、そこを覗いておりましたところ、レジュメにも書いてあります「王克敏雑件」「王克敏函札」「王克敏任偽華北政務委員会会長時存札」という一群の史料がございました。これをいろいろと見ておりましたら、これはなかなかおもしろいなと思いました。いま言いましたように、王克敏は中華民国臨時政府の行政委員長をやっておりました。その後、中華民国臨時政府と上海にあった維新政府、それから、南京の汪兆銘の政権といろいろと確執があつて、統合されていって、あとは南京の政府だけで、こちらは切り捨てられたような形になるわけですが、その頃にお互いがやりとりした手紙が残っているんです。維新政府の梁鴻志が王克敏に宛てた手紙ですね。統合したら、誰が主導権を握るのかといったようなことが書いてある。中国語で書いてありまして、私の同僚の劉傑君にこれを見せたところ、彼もニヤツとしていました（笑）。彼が汪兆銘の政権のことばかりじゃなくて、北京のほうも調べてくれることを期待しています。それはそれといたしまして、王克敏関係の史料のなかには、いろんなものがございまして、ここでは日本人の手紙を紹介しましょう。

伊藤 札とはレターのことですか。

島 そうです。レジュメのいちばん最後の13、14をご覧くださいますと、有名な人ですから、ご承知だろうと思えますけども、本庄繁の手紙がございました。この当時、王克敏は青島に住んで会社を経営しているんです。そこへ宛てたものです。年代がいつなのかは、ちょっとわかりませんが、民国何年だったか。読んでみます。

謹啓、年賀状御恵示感謝不尽候。只旧冬老生家事取込有之何へモ欠禮仕候条御許ルシ被下度候。國事愈々緊急ヲ加へ第三國ノ示唆ニ抛リ東亜同族相喰ムノ愚ヲ演シ居候事真ニ痛恨ノ至リニ御座候。我當事者ノ施策當ヲ失シ候事尠ナカラサルベシトモ存ゼラレ候得共上下一貫セル真意ハ一切ノ帝國主義ノ行動ヲ艾除シテ東亜同族ヨリ成ル諸國相提携シテ共同防衛以テ東亜ノ興隆ヲ期セントスルニ外ナラズ候。蒋介石氏等ガ若シ我希望ヲ以テ國力減退ノ結果ナリトシ不相変第三國ヲ招ヒテ其政権維持ノ為ニ只タ功利的見地ニ立チ徒ラニ感情ニ驅ラレ東亜ノ大局ヲ無視スルガ如キアランカ。結局第三國ノ思フ壺ニ陥リ東亜全局ノ為ニモ蔣氏自身ノ為メニモ容易ナラザル事態ヲ觀ル事ト存申候。何レニシテモ世局重大ノ折柄切ニ閣下ノ御自重御自愛ヲ祈上候。右貴酬旁切々台安ヲ希フ。敬具

これは本邦初公開ではないでしょうか。それから、もう一つ、次をご覧くださいますと、今度は喜多誠一でありまして、この人の手紙はあと2通ぐらいありました。封筒には「青島萊蕪二路一号、王克敏閣下。海拉爾第六〇〇部隊喜多誠一」と書かれています。これも読んでみましようか。

拝復先日ハ吉村君赴青致シ種々御指教ヲ蒙リタル趣同君ヨリ詳細通シ知来リ候。其節ハ御近影及御書簡ヲ頂戴本日正ニ受領仕リ候。其後意外ニ御無音ニ打過キ申譯無之トル

御起居如何ト常ニ懸念シ乍ラ雑事ニ追ハレ数ヶ月ト相成リ候。過般来北京政界ノ元老トシテ委員議長ノ資格ヲ以テ曹汝霖靳雲鵬ノ諸先生ト共ニ御活躍ノ趣新聞紙上ニ於テ拝見其御健闘ヲ喜ヒ居リ候。蚊龍雲ヲ得ザレバ本能ヲ發揮シ難ク重々御察シ申居候。大東亜戦争モ今日ノ如ク進展シ英米勢力一掃セラレ重慶トシテハ今ヤ全然成算ナキニ至レル今日何レノ点ヨリ見ルモ此上抗戦シ無意味ノ犠牲ヲ払ヒ民家ヲ苦シムルノ要ヲ認メス速カニ前非ヲ悔ヒ翻然弋ヲ収メテ大東亜建設ニ参加セザルベカラズ。重慶側ニ具眼ノ士モ尠カラズ。平和ノ聲モソロソロ起リ来ルベキヤニ存ゼラレ候処実情如何ニ御座候哉。小生北支ヲ去リテ既ニ二年有半。北滿ニ在リ遠隔シアル為一向ニ近況ヲ詳カニ為シ得ザルモ静夜過去ヲ回想シ現在ヲ眺メ責任ヲ感ズルモノニ御座候。何トカシテ一日モ速カニ重慶ノ反省ヲ促カシ支那時局ヲ解決シ、大東亜建設ニ兄弟手ヲ握リ進マザルベカラザルト念願致シ居リ候。此点閣下モ夙ニ感ヲ同ウシ居ラルルノミナラズ各方面ニ信用アル有能ノ士タルヲ以テ此上トモ御配慮相成リ度北京ニ赴カルル際ハ岡村大將ト面談連絡セラルルヲ可ナリト存ジ候。同大將ハ小生ノ先輩ニシテ久シキニ亘リ同一場所ニ於テ勤務シ相互ニ理解致シ居リ候ニ付遠慮ナク御意見ヲ開陳セラルルヲ可ナリト考ヘラレ候。承レバ人ト談合セズ外出セズ政治ヲ語ラズノ方針ヲ以テ専ラ誤解防止ニ努メラレアル趣、正義ノ主張ニハ第三者ノ謠言モ終ニ敗ルベク、御心配ナカルベシト確信セラレ候。御来示ノ件、梅津大將閣下ニ面接ノ際、忘レズニ御傳ヘ申スベク候。香港方面ニ関スル件モ御手紙ニヨリ判明致シ候。

山本氏（これは山本五十六のことでしょうかね）記念碑ノ件ハ未ダ具体的問題トナリアラズ候。小生モ根本中將ト相談ノ上当時ノ関係者協議ノ上早晚實現セシメ度其際ハ是非トモ碑面御揮毫ヲ御願ヒ致シ度心組ミ居リ候。本件ハ確定セバ更メテ申上クベク候ニ付夫レ迄ハ御発動ナキ様申シ進メ候。奥様御子供様ニ宜シク御傳ヘ下サレ度、炎暑ノ際折角御自愛御健勝ノ程切ニ御祈リ申上候。

以上のほか、日本人の名前がわからないのが何通かございますので、これは調べてみるとおもしろい。とにかく私が撮ってきた写真は全て劉傑君に提供してあります。それから、今度、来年の4月に近代史研究所に王士花さんという40歳ぐらいの女性の研究者がおられまして、その人が私の研究室へ来るということですので、また、近代史研究所とコンタクトができると思います。近代史研究所の下の図書室でコピーすると、1枚2元なんです。上の特蔵室へ行くと、写真を撮ったら、向こうが「幾ら出す」と言うんです。向こうが「10元から50元の間でいいから、幾ら出すか」と聞くので、「10元」と書きました。近代史研究所の中にいる人達は現物を自分の部屋のところに持っていますので、今後はいろいろ便宜をはかってもらえるだろうと思っています。

さて、それで、「おわりに」ということで、もう終わりにいたしますけども、終わりが長いかもしれません。さきほど言いましたように、私は佐賀にまいりまして、大隈とか大木喬任、江藤新平らがなぜ活躍できたか、その原因を探りました。副島種臣のお兄さんに枝吉神陽という人がおりました。この人が実に優れた人であった。吉田松陰の日記をみますと、長崎へ行った帰り、佐賀に寄って神陽にも会っているんですね。松陰の門下生の来原

良蔵が九州旅行するというので、野山獄のなかにいた吉田松陰はその人に、「肥前にて枝吉平左衛門必ず御尋ね成さるべく候。僕も一面識のみにて悉しくは存じ申さず候へども、奇男子と存じ奉り候」と安政2年に手紙を送っています。神陽はそういった人物でございます。『神陽先生遺稿』という文章が佐賀県立図書館郷土資料室に残っておりますが、十分に活用されていないんですね。大隈や江藤新平達が枝吉神陽から一体何を学んでいたのかということは明らかにされてない。私はそこを明らかにしようということで、この遺稿をいろいろと読んでおりました。

レジュメの最後の2枚目はその遺稿のなかの一部をコピーしたものでございます。まず、その史料をご覧になってみますと、「擬水戸浪人獄議」というのがございまして、恐らくこれは江戸時代の勉強ばかりしていたんでは、なんのことはよくわからないだろうと思います。ましてや、近代のほうからみても、これはちょっと理解が困難だろうと思います。これは実は、律令法がわからないと理解できない文章なんです。文体も奈良平安時代の文体で書いているんですね。それで、これはどういう文書かと言いますと、桜田門外の変で井伊直弼が殺された時に、井伊直弼を殺害した水戸の浪士達の行動を褒め称えている。彼らは処罰してはいけない。処罰するどころか、褒めなきやいけないんだということを書いたものなんです。当時、そういう心情を持った人はいるんでしょうけれども、この枝吉神陽はそれを法律的に論じている。なぜ褒めなきやいけないか。心情的に賛成するだけじゃない。法理的に論じているところが偉いと思うんであります。少々長いですが、ちょっと読んでみます。

水戸浪人の獄を議す。

右、武蔵国三月三日の解を得るに倂く(古代史ではそう読みます)、常陸国水戸藩浪人某々等十七人、薩摩国鹿兒島藩浪人某一人、合わせて十八人、右中将掃部頭藤原直弼朝臣を本国江戸城内に於て死に致す。某々登時に自刺す。某々は逃亡して往く所を知らず。某々は自ら侍従中務大輔藤原安宅朝臣に抵り、状を捧げて命を待つ。其の身を囚禁し、以て讞を請ふてへり。夫れ直弼朝臣、身は朝恩に浴して、涓埃の報を効すを念はず。大將軍源公の幼弱を欺き恣に其の家事を奪ひ、以て朝憲の如きを蔑ろにす。邪蘇教は国家の嚴禁する所なり。しかして彼の朝臣、私に之を奉ず。米利堅、英吉利、俄羅斯、仏蘭西、四蕃の開港互市を請ふや、情譎を以て測るべからず、廷議請ふ所を不可とす。而るに彼の朝臣、剛愎詐偽、王臣・公卿・大夫・士庶人を論ぜず、苟くも己と異なる者有らば、便ち計陥之罪を以て醜虜となす。其の黠謀を成就せり。形は真を奉ずと雖も、心は潜かに譎に向ふ。彼の朝臣をして、生きて今に至らば、天討必ずや加へられん。而して某等忠義奮発、一官兵も勞せず之を誅除するを得。之を律条に考ふるに、罪無くして功有り。賊盜律(賊盜律は法律の条文です)に曰く「謀叛者は絞」、捕亡律に曰く「罪人を捕へんとして、而して罪人杖を持ち捕へんとする者を拒み、其の捕へんとする者、之を格殺す、及び走り逐ぐる者を殺さば、皆な論ずる勿れ」と。此れ某等の罪無き所以なり。鬪訟律に曰く「知りて挙劾せざる者は、死罪徒一年」と。夫れ挙劾せずして罪有れば、則ち挙劾する者は功有るとなす。挙劾する者功あるとなせば、則ち之を誅除する者、何ぞ独り

功無しと為すを得ん。此れ某等の功有る所以なり。宜しく速かに彼の国に下知し、死者に埋葬を給へ。逃亡者には恩赦を下し、在禁者は其の禁を解き、以て身の本主中納言源慶篤卿に帰へし、禄仕を復せよてへり。国宜しく承知せよ。議に依て之を行へ。

これは全く奈良平安時代の律令格式の文章なんです。ここで律の条文を引っ張ってきているというのは実に素晴らしいことで、しかも、律の解釈がちゃんとしている。江戸時代というのはご承知の通り、江戸幕府には幕府法があり、各藩には各藩の法律があり、朝廷には朝廷の法律がありましたが、日本全国は観念的にはやっぱり古代の律令法がずっと施行されているわけなんです。將軍職といえども、律令制下の一つのポストであるわけなんです。それが実態は、武家政権がだんだんと伸張して行って、律令法は京都の一部に追いやられているわけですが、本来は、律令法が前面に出るべきであると、枝吉神陽は考えておりました。この人は昌平坂学問所に入学しまして、4年か5年いるんですね。それまでは昌平坂学問所では儒学ばかりを勉強していましたが、そこで律令格式を読ませるようにしたのはこの人の功績であります。だんだん私まで熱血漢になっていっちゃうな（笑）。

伊藤 幕末の志士になっている（笑）。

島 志士になりきっておりますか。それから、もうレジュメの左をご覧くださいますと、これは枝吉神陽が佐賀へ戻ってからのものです。神陽は帰藩すると、藩校で教えたり、什物方になったりしているんですが、書生を集めて勉強会をしています。その時の門下生、竹野本嵩が亡くなるんです。その祭文です。この祭文も、律令格式の文体なんです。

これ嘉永七年、歳は甲寅秋八月二十八日甲子にあり。枝吉經種清酌庶羞の奠を以て敬んで祭を竹野本嵩の靈に曰く、嗚呼本嵩子、生きては常に吾に聴き、死しても猶能く我が言を聞く乎。むかし子の童稚たりしとき、我曰く、嶄然頭角群子弟に異なる有りと。我東にあること六年（江戸には六年いたんですね）、帰れば則ち子已に類して弁す。二三氏と同じく国学に在り。乃ち既に己に名籍を諸生の間に籍して謂く、當今の世、資すべくして、古の文を学び、古の道を行う者は独り枝吉經種有るのみと。二、三子と同日夜我にいたる。

途中ずっと抜かしまして、最後のページをみていただきますと、この研究会でどういう人が勉強しているかということ、長尾新九郎、小出千之助、相良六郎助、池田文八、永淵宗一郎、坂井辰之允、石丸虎五郎、長森伝次郎、池尻勘六、江藤又蔵（これが江藤新平です）、早田栄橘、こういう人達と一緒に勉強しているわけです。ここには年代的に載ってませんが、副島種臣はここにおりました。大木喬任もおりました。ちょっと遅れて、大隈重信もいたわけなんです。ここで何を勉強したかということ、律令です。しかも、その律令を知識として勉強するのではなくて、幕府を倒す、朱子学と戦うためにやるわけです。大隈さんもそういうふうに回顧談に書いております。実践的な勉強をしていたわけです。この前後副島種臣は江戸へ行ったり、京都へ行ったり、討幕を説いて回るわけです。ちょっと早過ぎたんで入れられずに、佐賀に戻ってくるわけです。

このように、神陽の教えを受けた者たちが活躍したのでありますが、当の神陽は残念ながらコレラにかかりまして、文久2年に、41歳で亡くなりました。しかし、その遺志はずっと継がれて、この勉強会のことは大木喬任の日記にも書いてあります。明治維新になって、「政体書」というのが出されて、太政官制、律令制が登場します。誰が「政体書」をつくったか、その後の太政官制を誰が起案していたのか、というと実は副島種臣なんです。そして、そこに江藤新平も関与します。副島種臣はまったく神陽と同じような考え、同じ行動をした人です。それから、副島種臣はそういう太政官制をつくっただけじゃなくて、新律綱領という刑法典の制定にも関与しています。最終的には彼が監督して彼の屋敷でつくるわけです。律と令、両方ともに副島が関与している。そして、初代の司法卿に誰がなったかというと、江藤新平なんです。その後、司法卿、司法大臣に誰がなったかというと、大木喬任なんです。大隈さんは司法省畑じゃないわけですけど、なぜ大隈重信が中央政界に出るようになったのかというと、彼は最初長崎にいた。あそこは長崎奉行が逃げて、混乱するんですね。いろんな業者たちが混乱するわけです。外国人と日本人の付き合いがうまくいかない。それを裁いたのが大隈なんです。そこで頭角を現して、それから、中央に引っ張られて大坂に来ると、キリシタン問題があって、外国の公使達とやり合うわけです。それを取り仕切ったのは誰か。外国の公使達と弁論したのは誰か。大隈重信なんです。大隈重信は紛争処理能力があった。言葉を言い換えれば、法的なセンスがあった。じゃ、一体そういう法的センスはどこで学んだかということ、神陽のところで学んだんだというのが私の結論なんです。教科書にも、吉川弘文館の国史大辞典にも、枝吉神陽の名前は残念ながら登場しませんが、是非登場させていいのではないかと思います。関係者の方々、よろしくお願いします（笑）。

伊藤 神陽というのは号ですか。

島 号です。名前は經種と言います。

伊藤 僕がいままで聞いたことないようなお話ばかりを聞かせていただきまして、ありがとうございました。お帰りの際に、私の部屋にちょっと寄っていただきまして、井上毅の書簡をみていただければと思います。

渡辺廉吉は活字になさるご予定なんですか。

島 日誌のほうも全部です。三校まで終わっています。何かご承知のことがあったら、是非お教え下さい。

伊藤 あれはどうなっているんだろうなということを私もちょっと廉吉伝をみて気にはなっておったのですが、まさかこういうふうにお調べになっている方がいらっしゃるとは思いません。しかし、これは非常におもしろそうですね。

西川 来翰のほうも出版されるんですか。

島 はい。憲政資料室では一応読み下してありますけども、それと別に……。憲政資料室のは来翰を全部は取ってないんですね。だから、それもできたら入れようかなと思っています。

伊藤 取ってないというのはどういう意味ですか。

島 翻刻してないんです。

伊藤 伊藤の手紙が多いんでしょう。

島 そうですね。伊藤の手紙は何通ありましたかね。いま、何通かはちょっとわかりません。

伊藤 数え切れないほどあるという。

島 いや、それほどはないですけど。

伊藤 峰さんのやつはちょっと驚きました。史料というのはこういうことがあるんですね。僕は伊藤博文の場合も、やはり関係者が持って帰ってというのが2件ばかりありましたので、やはりそういうものもちゃんとみておかないと危ないという感じがしました。井上毅から始まって、だいたいいろいろ広がってということですね。

島 漸く律令にちょっと戻ってきたというところですか（笑）。

伊藤 そんなことをおっしゃらずに、来たついでに（笑）。最後は、佐賀の讃歌になりましたけども、佐賀のほかの人達の史料はどうなんでしょうか。

島 江藤新平文書がマイクロフィルムになりましたけども、あれはなかなか使いづらいんですね。江藤家にあるものと、県立図書館にあるものと統合されていない。実は、いま佐賀の県立図書館の人と県の文化課にいる人と、それに私も加わって、私が佐賀に帰る時に研究会を開いて、これを全部活字化しようじゃないかという動きがありまして、少しずつ実は読み進めております。

伊藤 何かカテゴリーで分けているわけじゃないんですか。

島 マイクロですか。

伊藤 いやいや、その2つになっているというのは。

島 そういう訳でもないようですね。詳しくはよくわかりませんが。

伊藤 なんとなく2つになっている。

島 佐賀はどういうわけか、いろいろな人の伝記があまり出てないんですね。佐賀の村興しじゃないですけども、なんとかしようということで、少しずつ……。佐賀大学というのはあるんですけども、あそこで郷土史をやる人はほとんどいない。佐賀の郷土史をやる人をもっとつくらないといけないかなと思っております。

伊藤 国立大学で、地元のことをやる人というのはほとんどいないんですよ。

さて、ご質問は。皆さん、島さんの迫力に押されて、声も出ないという感じですか。どうぞ。

西川 島先生といいますと、信山社の史料集でずいぶん学恩をいただいたのですが、これをおつくりになる時の史料収集のことで何かお気づきのことはございますでしょうか。集められたものは全部あの本に入っているということですか。

島 だいたいほぼ入っております。宮内庁の書陵部にあまり史料が残ってなくて、井上毅文書とか、伊東巳代治文書とか、三条文書とかにあって、書陵部には意外と少ないなというのはちょっと驚いたんですけど、宮内省の史料というのは焼けたんですか。

梶田 私もあまり把握してないんですけども、先生が出された史料集は大正7年の皇室典範増補までで終わってますね。

島 そうです。

梶田 それ以降の大正15年に重要皇室令が多く出されていますけども、その関係のものについては、書陵部ではたぶん公開ですね。歴史史料として公開になった可能性があると思いますので、そちらのほうを当たられるといろいろいいと思います。そのなかをみますと、それ以前の明治以来の審議過程の書類も入っているということもあります。

島 入っているということもあるんですね。私がやっていた頃に、國學院の大原さん達が皇室令のことをやりたいとか、京都産業大学の所氏の門下生がやりたいとか、いろいろ言っていたものですから、私はちょっと手を引いています。幾つかマイクロを撮ったりしたのはあるんですけども、まだ何もしてません。牧野文書にも残っていますね。

伊藤 劉傑君はちゃんと勉強していますか。

島 なかなかいろいろ。

伊藤 外で活躍している。

島 あの人は本当にいい人で、誰もあの人の悪口を言わないですけど、唯一欠点があるとすれば、「ノー」と言えないことです。あれが欠点じゃないかな。だから、人から言われると、「イエス」と受け入れていって、いろんな仕事を引き受けているんじゃないでしょうか。

伊藤 是非抑えてください。それでは特にご質問がなければ終わりにしたいと思います。きょうは、どうもありがとうございました。

島 どうもありがとうございました。

(終わり)